

シリーズ 私の一冊の本

環境科学研究所 榊原啓之 先生

楡周平著 『ゼフィラム』

閲覧室1階 913.6/N 78

朝日新聞出版

私の一冊」への執筆依頼を受けたのが昨年の秋頃。放置していた小生が悪いのではあるが、気づけば締切期日が迫っていた。そんな中、「私の一冊」用にと読み始めた本（デイヴィッド・バーカー著の胎内で成人病は始まっている）の内容は…確かに興味深く、最後まで飽きることはなかったが、私自身考えるところがあり、「折角だけど、これは専門分野が近い学生たちに、講義か何かの機会に紹介することにしよう」と、方向転換することにした。そこで、読みやすく、かつ教養書にもなりうる図書として（相応しいか否かは、とりあえず置いて）、楡周平氏の『ゼフィラム』を紹介したいと思う。

新書を購入するとき、よほどのご最良作家でもなければ、タイトルを見て、手に取り、そして最初に目にするのは“帯”ではなかろうか。本書の帯には、

「電気自動車は本当に究極のエコカーなのか!？」

とあった。小生、所属が環境科学研究所であるため、この様な文言には減法弱い。移動時間の暇つぶし用にと、購入し早速読み始めたが、中々に面白かった。

物語は、米国でオバマ政権が始まる直前の時期、日本自動車工業（架空）が社運をかけて開発したハイブリッド車を、どうすればインパクト強く市場に送り出すことができるのか、との問題提起から幕が上がる。今やなんでも新しいものには“エコ”、とにかくエコ。“環境に優しい”が時代のキーワード。では、機能面で類似した車種が居並ぶ自動車業界で、この2つのキーワードを前面に押し出して旗振れば、はたして競合他社の一歩先を進めるのか？答えは否。もはや、環境やエコは考えて、そして取り組むことが当たり前。ハイブリッドや低燃費なんて言葉も、売りにはならない、新鮮実がない。では、どうすればよいのか…環境に優しい車の開発を目指した取り組みが展開されていく。

企業がベースの物語なので、利益最優先な取り組みへと進んでいくのは仕方ないが、環境問題へ取り組む意識には、共感を覚えた。もちろん、「小説だからね、そんなに上手いこと話が進むんだよ」と思われる方が多いとは思う。そして、物語の結末にも賛否両論あると思う。しかしながら、至る所に出てくる環境問題に関連した話題は、よく調べられており（と思う）、特にブラジルでの森林伐採ーサトウキビ・バイオエタノールに関する件は、現在、現実生じている一つの環境問題を考えるための良い話題提供となるだろう。また、「ブラジルでは本当にそんな現状が起きているのだろうか？」との疑念を抱き、私のようにネットサーフィンを始められる方もおられると思う。このような背景から、電気自動車やハイブリッド車といった近年注目されている環境への取り組みを題材にしている、そしてちょっとした空き時間に気軽に読める本書を「私の一冊」としてお勧めしたい。